東日本大震災での災害看護支援ナース活動報告書

東日本大震災に対して活動していただいた、新潟県看護協会所属の災害看護支援ナースの皆様の活動報告書を掲載しました。

２９．門脇小学校（２）	（宮城県石巻市）	５月 ６日～５月 ８日
２８．ビッグパレットふくしま（５）	（福島県郡山市）	４月 26 日～４月 29 日
２７．大船渡病院（３）	（岩手県大船渡市）	４月 24 日～４月 27 日
２６．ビッグパレットふくしま（４）	（福島県郡山市）	４月 16 日～４月 17 日
２５．宮城県看護協会内対策本部	（宮城県仙台市）	４月 ３日～４月 ７日
２４．桃生農業者トレーニングセンター	（宮城県石巻市）	４月 27 日～４月 30 日
２３．市立石巻女子高校・住吉小学校（２）	（宮城県石巻市）	４月 24 日～４月 26 日
２２．市立石巻女子高校・住吉小学校（１）	（宮城県石巻市）	４月 24 日～４月 26 日
２１．住吉中学校	（宮城県石巻市）	４月 23 日～４月 26 日
２０．ビッグパレットふくしま（３）	（福島県郡山市）	４月 22 日～４月 25 日
１９．気仙沼市総合体育館	（宮城県気仙沼市）	４月 21 日～４月 24 日
１８．釜小学校	（宮城県石巻市）	４月 19 日～４月 22 日
１７．鹿折中学校	（宮城県気仙沼市）	４月 19 日～４月 22 日
１６．門脇小学校	（宮城県石巻市）	４月 19 日～４月 22 日
１５．気仙沼市総合体育館	（宮城県気仙沼市）	４月 15 日～４月 18 日
１４．大街道小学校	（宮城県石巻市）	４月 12 日～４月 15 日
１３．石巻女子高校	（宮城県石巻市）	４月 12 日～４月 15 日
１２．大船渡病院（２）	（岩手県大船渡市）	４月 11 日～４月 14 日
１１．大船渡病院（１）	（岩手県大船渡市）	４月 11 日～４月 14 日
１０．ビッグパレットふくしま（２）	（福島県郡山市）	４月 10 日～４月 13 日
９．ビッグパレットふくしま（１）	（福島県郡山市）	４月 10 日～４月 13 日
８．青葉中学校	（宮城県石巻市）	４月 ８日～４月 11 日
７．湊小学校	（宮城県石巻市）	４月 ６日～４月 ９日
６．石巻好文館高校	（宮城県石巻市）	４月 ４日～４月 ７日
５．住吉小学校	（宮城県石巻市）	４月 ２日～４月 ５日
４．蛇田中学校（2）	（宮城県石巻市）	３月 27 日～３月 30 日
３．蛇田中学校(1)	（宮城県石巻市）	３月 27 日～３月 30 日
２．湊小学校	（宮城県石巻市）	３月 26 日～３月 29 日
１．松岩公民館	（宮城県気仙沼市）	３月 26 日～３月 29 日

災害看護支援ナース活動報告書

報 告 者：佐藤　真樹
所属施設：新潟看護医療専門学校
報告月日：平成 23 年 4 月 4 日

活 動 日	３月２６日（土）～３月２９日（火）
活動場所	施設名　　松岩公民館（気仙沼）　　（県名　宮城県）

活動内容

松岩公民館では、水道・電気・ガスが使用できる状況にありました。避難している方は、337 人でした。

水道を使用できる状態でしたので、トイレは清潔に保たれていました。食事は、３食ボランティアの炊き出しが行われている状況でした。２週間が経過した状況では、みなさん疲労がみられており、風邪症状の方が 30～40 人ほどでした。血圧も 200 を超えている人が 10 人程度いらっしゃいました。活動のほとんどは、感染防止と言う目的で行いました。マスクは十分な数が物資としてありましたので、全員に朝食後に配布して着用を声かけていきました。マスクも白や青やピンクなど色がありましたので、日々マスクの色を変えて２日続けて装着している方には新しいものと交換できるように工夫しました。手洗いに関しては、食前にはアルコールによる消毒を徹底しました。公民館の入り口には、避難している人の管理や面会などの受付がありましたので、そこでもアルコールを用いての手指消毒の協力を求めました。含嗽については、トイレの手洗い場にイソジンのうがい薬を設置し、いつでもイソジンを用いてのうがいができるようにしました。就寝前は、うがいを声かけて協力を求めました。換気については、１日３回 15 分間、館内の放送を使用して意識してもらえるようにしました。

疲労が蓄積されてきている状況で、入浴もできない状況がありました。日々30～40 人程度は、健康相談に救護所へいらっしゃいました。中には、テントに頭部をぶつけて出血された方や小児のじんましんや喘息発作など緊急を要する方もいらっしゃいました。その場合は、救急で診てもらえる病院へ連絡し受診できるように配慮しました。

所　感

地震から２週間が経過し、感染予防が重要になってくると思いました。避難所生活では、発熱している人を隔離することも容易ではないことを実感しました。そのため、予防や現在の状況を悪化させないような活動が必要であると感じました。

現場は、テレビで見る以上壮絶な状況です。避難所によって必要なものが違ってきます。そのため、現場の状況をアセスメントし活動することが重要です。

この経験を職場などに伝え、少しでも復興の力になれればと考えています。

新潟県看護協会　ＦＡＸ番号：０２５－２６６－１１９９

災害看護支援ナース活動報告書

報 告 者：石川　百恵
所属施設：済生会新潟第二病院
報告月日：平成 23 年 3 月 31 日

活 動 日	３月２７日（日）～３月３０日（水）
活動場所	施設名　　宮城県石巻市蛇田中学校避難所　　（県名　宮城県）

活動内容

・蛇田中学校に避難している約５００人～６００人の巡回診療の介助と、保健指導（感染予防や、エコノミークラス症候群、廃用症候群予防、自分の健康は自分で守ることの声かけ等）、トイレ・洗面台の衛生整備を中心に行った。

・ボランティアで診療をされていた北海道の医師と共に日中、避難所に残っている方の１人１人に声をかけて、話を聞いたり、急性感昌症状のある方を救護所へ受診する様に促がし、下痢・嘔吐の症状が出てくる方が日々増加してきており、食事や水分補給ができなくなってきた方の救護所への受診を促がして、感染拡大を予防するため、手洗いや手指消毒の徹底を啓発してきた。又、特に老人や子供に手洗い手指消毒剤の使い方をポスターなど（１人１人への声かけも）を提示した。

日中、自宅の片付けや職場で仕事してくる方へは、夜の巡回時に疲労の蓄積で熱発してくる人も多く、適度な休息を促がし、被災時の状況を話してくる方も日に日に多く聞かれてきたので、話を聞く事を心がけた。

・元々要介護者は、家族と共に避難をしている方がいたので、内服薬が継続できていたか、褥瘡が出来ていないか、保清（陰洗や足浴）を行った。又、介護を行う家族の健康状況も注意してきた。

・ＤＭ治療中で、褥瘡が悪化した方の血糖コントロール（血糖チェックとインスリンのスライディング補正）を指導介入し、外科Ｄｒ.と内分泌Ｄｒ.とデブリードマンを行ない創傷処置も介入してきた。

所　感

・日赤の救護所が避難所内にあることから、スムーズな受診促がす事ができて、比較的に恵まれた環境で活動する事ができ、私達もＤｒや他の巡回医療班との連けいができるという安心して活動できた。

被災者の欲求が日々大きくなっていく事で、対応の限界を感じる事があり、先の見えない避難生活での支援ナースの活動が何ができるのかと感じた。

現場で活動しているＤｒ、Ｎｓなど疲へいしており、又、機会があれば支援に参加して手助けできれば・・・と思います。

新潟県看護協会　ＦＡＸ番号：０２５－２６６－１１９９

災害看護支援ナース活動報告書

報 告 者：梅沢　祐一
所属施設：済生会新潟第二病院
報告月日：平成 23 年４月１１日

活 動 日	３月２７日（日）～３月３０日（水）
活動場所	施設名　　宮城県石巻市蛇田中学校避難所　　（県名　宮城県）

活動内容

私たちの派遣先には既に災害支援ナースが派遣されており、その方達から避難所内で発熱、下痢・嘔吐を起こしている避難者が多いという送りがあった。

幸いにも、そこの避難所には日赤 HP の救護所が設置されていたため、体調不良を訴える方に対してはすぐに受診ができ、内服・点滴による加療を行うことが可能であった。

しかし、感染予防の観点からも石鹸・ウエルパスによる手洗いの必要性、避難所内の環境整備、マスクの着用を知ってもらう必要があると判断した。そこで、手洗い方法のポスターを作製し洗面台に貼り、1 日 2 回の避難所全体を巡回している際にも手洗いの呼びかけを行なった．環境面においては、各階で避難者の方々が自主的に廊下の清掃やトイレ・洗面台の清掃を行なっている姿を見かけたが、汚染されている洗面台も所々見受けられたため私たちで清掃を行なうこともあった。また、マスクを持っていても着用しない方、同じマスクを何日も使用している方に対してマスク着用の必要性や１日１枚を目安にマスクの交換をするようマスクを渡し呼びかけを行った。

他活動としては、1 日 2 回（9：30 頃、18；30 頃）の避難所全体の巡回、1 日 1 回日赤 HP スタッフの回診に同行、日赤 HP の Dr.指示のもと BS 測定、褥瘡処置。寝たきりの方の足浴陰部洗浄などを行った.

我々が派遣された避難所への後任の災害支援ナースの派遣は 3/30 には無いとの旨をチームリーダーから前日に確認していたため、避難所内の高齢で救護所への受診が困難な方、寝たきりで往診が必要な方、褥瘡の処置が必要な方などをリストアップし、日赤 HP のスタッフへ今後もフォローして頂きたい旨を送り災害支援ナースとしての活動を終了した。

所　感

先の見えない避難所生活やプライバシーが保てないなどストレスの多い環境の中での生活を強いられている避難者の現状を実際に見て TV などで見ていた状況以上の過酷さだと痛感した。

今回私たちは“感染予防”を主体に行ったが、日々変化していく避難所内の環境や避難者のニーズを見極め、数日間という短い活動期間の中で支援ナースとして何をするべきかという状況判断が必要なのだと感じた.

災害看護支援ナース活動報告書

報 告 者：白倉　透規
所属施設：立川綜合病院
報告月日：平成 23 年 4 月 13 日

活 動 日	3 月 26 日（土）～　3 月 29 日（火）
活動場所	施設名　　石巻市　湊小学校　　（県名　宮城県　）

活動内容

3 月 26 日に石巻市湊小学校避難所へ二人一組で二次隊として派遣された。(発災 15 日目)。先遣隊は 24 日より活動開始し 26 日から 27 日にかけて後任と重複する形で活動内容を引き継いだ。

活動に入る際に実質の活動期間は 2 日間しかないこと、派遣先の避難所には二次隊で入るという点から、「避難所における問題点の抽出・活動目標を明確にして後任へ引き継ぐ」ことを活動目標とした。

健康面は発災 3 日目から医療救護班が 1 回/日巡回しており、避難所内の医療担当が窓口になり医療救護班からの指導内容を避難所内に伝達していた。しかし、医療担当の方は避難されている方であり医療従事者ではないことから、支援ナースが両者の間に入り医療担当のサポート、三者間での情報共有・連携が十分とれるように調整した。

避難者の健康問題としては主に呼吸器系疾患が多く、派遣時にはインフルエンザ B 型 1 名がおり隔離部屋を確保し対応していた。各部屋を巡回すると咳嗽をする方々が多く見られていた。活動期間中、呼吸器系疾患の増悪で連日 1～2 名の救急搬送、医療機関受診で入院となるケースがみられた。急性腸炎疑いも訴えは少ないがトイレ環境の観察から潜在的に多いことが予想された。感染症対応は、支援ナースが入る前から巡回診療での指導、救援物資の充足から各部屋に手指消毒・含嗽薬が配置されていた。しかし対応の手指消毒・含嗽・換気の徹底がされていないことが明らかになった。避難所内は本部長を中心に班長・係を決め指示系統は確立されていたため、班長会議を通して感染症対策の必要性を説明・協力を求めて、対策状況を巡回し確認した。

さらに避難所内の本部業務が 2～3 名に集中しており心身共にオーバーワークになっていた。活動期間中に本部役割を細分化する動きが見られたが、しばらくは一極集中傾向が改善されないように思われたため、こころのケアチームが巡回診療開始との情報があり後任者へは本部メンバーへの介入の必要性も伝達した。

所　感

・限られた活動期間の中で活動目標・行動計画を明確にする必要性、支援ナース個々ではなく交代で活動する支援ナースが共通認識の基、連携しなければならない重要性を改めて感じた。
・今回は避難所が立ち上がってから支援ナースが介入するまで約二週間経過しており、避難所内はある程度組織が形成されていた。その中で活動する際、特に本部機能に携わる方々との良好なコミュニケーションを構築することが、その後の支援活動に反映されることも活動を通して知ることができた。

新潟県看護協会　ＦＡＸ番号：０２５－２６６－１１９９

災害看護支援ナース活動報告書

報 告 者：長井　直子
所属施設：田宮病院
報告月日：平成 23 年 4 月 13 日

活 動 日	４月２日（土）～　４月５日（火）
活動場所	施設名　　石巻市立住吉小学校　　（県名　宮城県　）

活動内容　(主なもの)

・避難所の各部屋を巡回し、被災住民の健康チェックをする。
　その上で受診した方がよいと思われる方には受診をすすめた。
・救護室の管理（物品整理、清掃、保護している方の生活援助）
・仮設トイレの清掃（次亜塩素酸ナトリウムの希釈液をスプレーボトルに入れ、
　ドアノブや便器に吹き付け、シートタイプのクリーナーで拭く）
・巡回診療に来る医療班（心のケアチームも含む）との情報交換
・院外処方された薬の管理
・ミーティング（７：００，１２：００,１６：３０）へ参加し巡回診療の時間、
　注意事項等を伝える。

所　感

今回初めての災害支援活動だったので緊張したが、被災された方の訴えを傾聴し、その方達が主体となって避難生活を送ることができるように心がけた。

実質的な活動が２日間と限られているため、一緒に支援活動を行う人とのコミュニケーションを良くしておかないと、円滑な支援活動を行うことは難しいと感じた。

災害看護支援ナース活動報告書

報 告 者：伊賀山京子
所属施設：新潟大学医歯学総合病院
報告月日：平成 23 年４月８日

活 動 日	４月４日（月）～　４月７日（木）
活動場所	施設名　　宮城県　石巻好文館高等学校

活動内容

４月４日朝に東京を出発し、夕方、好文館高校に１名で派遣された。すでに３名の派遣ナースが勤務していた。好文館高校の武道場では、１階と２階に分かれ計９０名程度が生活されている。ライフラインは電力のみ、水道は止まっており復帰のめどは立たず、トイレは仮設及び館内のトイレを水洗なしに使用していた。食事は自衛隊の炊き出しが毎食あり、近所の自宅に住む被災者にも提供されていた。当避難所の全体像としては、１階は 40~80 代を中心とした家族が中心である。多くは自宅が倒壊し日中は自宅や職場の清掃等に出かけ、夜は避難所で休むという生活を送っていた。ADL は自立されているものがほとんどで数名の杖歩行者がいる。重傷者はいないが発熱者が常におり、咳漱や疲労による体調不良の方が多かった。

看護協会からは４～２名の看護師が交代で常駐し、状況に合わせ人数が決定され（私の帰還時には１名になっていた）避難所に被災者とともに寝泊まりし 24 時間の対応にあたった。活動内容は、避難者の体調把握と DMAT 診療受診者のピックアップ、環境面の整理等とした。避難者は 90 名と比較的少なかったため、まずは状況把握のため全世帯に情報収集し、名簿と館内での位置を MAP 化した。さらに簡単な既往と服薬状況、現症を確認し、氏名を覚えて声かけを多くし信頼関係の確立に努めた。空いた時間でこまめにコミュニケーションをとり心理面の把握とケアを行った。当避難所は毎日 8：30～12：00 まで DMAT(長野県)が診療に来るため、効率的な診療ができるよう受診者のピックアップと呼び込み、チームへの情報提供を行った。咳漱患者が多かったので鎮咳剤処方のみでなくイソジンうがい薬やトローチ等の処方が可能か等、症状に即したアプローチも行った。また環境面では水洗トイレが使えないためトイレの整備をともに行い、清掃についての助言等も行った。さらに廊下には汚染防止に新聞紙やスノコが敷かれており転倒の危険が高いため（実際に転倒者がいた）撤去して清掃を丁寧にする、上下足の履き替え線引きをはっきりする等の対策をすすめた。現時点で感染性の下痢（ノロウイルス等）やインフルエンザの発生はなかったが、不衛生状態は続いており、各自の擦式アルコール消毒だけでは限界がある。水での手洗いやうがいが楽にできる環境を整えたいと感じたが、時間もなかったため後任者へ引き継ぎ活動を終了した。

所感

基本的にコミュニティの自主性を尊重しつつ、実施可能な点をアドバイスさせていただくというスタンスで接した。実働３日間という短期間で、何ができるかを考えながら同時に動かねばならず、指示やゴールもないため模索しながらの活動であった。看護師チームの人数が流動的であり、前任者→私→後任者へという引き継ぎも難しく、高いコミュニケーション力と適応力が必要と感じた。また駐在している市役所職員や、突然訪問する保健師や心のケア等の医療スタッフとの協力等、調整役としての働きも重要であり災害看護は職種の枠を超えた調整管理能力が必要だと身をもって実感した。被災後１カ月弱、心のケアが必要な時期とは言われているが、栄養不良や劣悪な住環境、心労

から来る体調不良も多く、一側面からのケアでなく多方面から長期的なフォローが望ましい。

個人的には水の大切さを強く感じた。石巻地区は津波で壊滅的な打撃を受けており、ようやく道路が通れるようになった状況で、周囲にはテレビで見たような車や家屋の残骸が多数放置されたままである。外はヘドロと砂ぼこりで空気も汚い。水道の整備はまだ全く予定が立っていない。入浴、洗髪等の基本的生活を早く取り戻してほしいと切に願う。今は片づけ等で頑張っている被災者の皆さんも山ほど不安を抱えており、一段落した後に無力感に襲われるであろう事を考えると心が痛む。継続的に支援したいと思う。

新潟県看護協会　FAX 番号：０２５－２６６－１１９９

災害看護支援ナース活動報告書

報 告 者：腰越　文枝
所属施設：湯沢町保健医療センター
報告月日：平成 23 年 4 月 14 日

活動日	4 月 6 日（水）～4 月 9 日（土）
活動場所	施設名　　石巻市立湊小学校　　（県名　　宮城県）

活動内容

・避難所被災者データ、概要、入所者・被災者総数、対応患者数
・後続災害ナースへの引き継ぎ書
・安否と現地の状況報告（１～１２項目を１日１回メール報告）
　１メンバーの安否情報　　２避難者数　　３医療を必要とする患者数　　４要介護者数
　５褥瘡患者数　　６精神疾患患者数　　７感染疾患患者数　　８ライフライン状況
　９トイレ状況　　10 食事状況　　11 その他情報　　12 物資要望
・被災者データ　　カルテをファイルに保存整理、重症度別にファイル分類
・歯科受診、入浴介助サービス、心のケア等受診者のリスト作成
・各洗面所にうがい薬作り、有熱者検温、血圧測定
・異常の早期発見のための巡視
・本部と連携し、その都度対応、他県スタッフとのミーティング
・清掃　　何でも行いました。

所　感

・他県スタッフとの継続、医療、看護の必要性を感じました。
・水が使用できない事で、感染症を引き起こし、すべてをストップさせる事、トイレ、食事、入浴が生活の基本であり、それらができる生活がどれほど幸せであるかを痛感いたしました。
・災害支援で、一日半、一人で避難所 300 名を見させて頂きました。
・平成 23 年 4 月 7 日 23 時 32 分頃、震度 6 強の余震があり恐怖でした。
・また災害支援に行きたいと思います。

新潟県看護協会　FAX 番号：０２５－２６６－１１９９

災害看護支援ナース活動報告書

報 告 者：　兵庫　美智代
所属施設：　佐渡市立両津病院
報告月日：平成 23 年　4 月　20 日

活 動 日	4月　8日（ 金 ）～　　4月 11　日（ 月 ）
活動場所	施設名　石巻青葉中学校避難所　　（　県名　宮城県　）

活動内容

被災者 270 名前後の避難所での活動をしてきました。
ライフラインの復旧は電気のみで、ようやく 11 日午前中に水道が復旧しました。

・グランドにある簡易トイレまでの誘導および排泄介助
・ダンボール箱を利用した、ポータブルトイレを作成し使用していただいた。
・1 か月半の乳児の沐浴
・朝夕の血圧測定および体温測定
・部屋の環境整備としての換気、掃除の声かけ
・感染症部屋の掃除、消毒薬での上拭き、換気、布団干し
・夜間、不眠・不安を訴える方の話し相手
・夜間徘徊老人への対応、トイレ誘導

所　感

はじめての参加であり被災者の方は、私たちの援助に対してすべてのことに「ありがとう」と言葉をくれました。
・　・　・　今、大変なのはあなた方ではないのか　・　・　・
現場で見るのと、ＴＶなどの報道で見るのとでは大きな違いがありました。
被災者の方たちは、ほんとうに頑張っていました。
短い期間で、みなさんの力になるには不十分でしたが機会があれば又、支援活動に参加したいと思います。

新潟県看護協会　　ＦＡＸ番号：０２５－２６６－１１９９

災害看護支援ナース活動報告書

報 告 者：丸山　由美子
所属施設：医療法人崇徳会　田宮病院
報告月日：平成 23 年　4 月　18 日

活 動 日	4月　10日（　日　）～　　4月13　日（水　）
活動場所	施設名　ビッグパレットふくしま　　（県名　福島県）

活動内容

４月９日２１：３０に原宿会館集合。２２：００出発。福島県への支援ナースは５名。
私たち２名は、ビックパレットふくしまという避難所での活動となる。
２，０００人以上が避難している避難所。
日勤者は比較的人数がいるため、夜勤勤務での支援となった。
４月１０日～ノロウイルスが発生しており、症状のひどい方を「観察室」にて隔離。
看護協会の支援ナースは、主に観察室での支援を行なうこととなった。
支援内容としては、

・バイタルサインのチェック
・嘔吐、下痢の看護
・トイレ消毒
・使用リネンの消毒
・医師の診察介助
・食事の手配、配膳　　などを行なった。

【看護協会へのお願い】
日本看護協会と連絡を密に取り、出発前に詳しい必要な情報を流して欲しかった。
活動場所によって必要なものにかなり違いがあり、準備をする段階で情報がわかるととても助かると思いました。

所　感

２０００人以上が避難している避難所で、１ヶ月経過した今でもかなり現場は混乱していました。自分たちも被災者でありながら、不眠不休で避難者の健康を管理している地元の保健師の方に頭が下がりました。

愚痴も言わずいつも笑顔で接してくれていた保健師の方たちの手伝いを、少しでも行なうことができて良かったと感じています。支援先の避難所との連絡ももっと細かく取って欲しいと思いました。現場は混乱している状態で私たちが支援に行くことが逆に手を煩わせてしまう事は、非常に申し訳ないと感じました。

災害看護支援ナース活動報告書

報 告 者：五十嵐　薫
所属施設：田宮病院
報告月日：平成 23 年　4 月　18 日

活 動 日	4月　10日（　日　）～　　4月　13　日（水　）
活動場所	施設名　ビッグパレット（避難所）　　（県名　福島県）

活動内容

・ビックパレット内で急性胃腸炎が流行しており、避難している避難者（２０００～３０００名）をＤｒと一緒に巡回し、症状の出ている人数の把握、症状の出ている方へ対応する。
・急性胃腸炎で病院に入院する程ではないが、継続した観察が必要な避難者を一カ所に集めた「観察室」で、そこに入室した避難者に対応（状態把握、ＶＳ測定、嘔吐・下痢時の対処食事など）する。
・トイレ清掃、リネン類の交換などの環境整備の実施。
・観察室での対応についてのマニュアル作成。

所　感

・避難所での生活が長期に渡っていて環境的な問題でよく眠れないと言う方が多く、精神的・体力的にも弱っているため、感染症も流行しやすいのではないかと感じた。
・様々なところから支援が入っており、それぞれとの連携が大切だと感じた。
・日本看護協会から何名災害看護支援Ｎｓが入るかなど、現地に連絡が行き届いておらず、現場が混乱することがあった。現地の職員にも迷惑がかかるため、看護協会から現地にこまめに連絡するか、コーディネーターを１名おくなど対策をとった方がよいと思う。
・県によって看護協会が準備してくれている荷物が違ったが、寝袋や医療道具などをまとめたリュックサックを準備してくれている県もあった。新潟県災害支援マニュアルには県が用意する物が記載してあったが確認したところ「ない」ということであった。マニュアルに記載されているのであれば用意してあるとよいと思った。

新潟県看護協会　　ＦＡＸ番号：０２５－２６６－１１９９

災害看護支援ナース活動報告書

報 告 者：小川　紀子
所属施設：新潟大学医歯学総合病院
報告月日：平成 23 年 4 月 20 日

活動日	4 月 11 日（土）～4 月 14 日（木）
活動場所	施設名　　岩手県立大船渡病院　　（県名　　岩手県）

活動内容

4 月 10 日 22：00 に日本看護協会を出発し、翌日、6 名が大船渡病院に派遣された。私達 6 名のうち 2 名は日勤帯で病棟勤務、他 4 名は救急外来勤務（10：00～22：00 が 2 名、16：45~翌日 8：45 が 2 名）に割り振られた。私は後者の 10：45～の救急外来配属となり看護業務にあたった。すでに 1 名の派遣ナースが救急外来で勤務しており、他病院からの医療班や同県立病院からの応援ナース、被災県出身者が自ら看護支援を申し出て活動する災害ボランティアがいる状況であった。

派遣先の病院勤務体制としては、2 交代制をとっており、看護スタッフのほとんどが超過勤務を強いられている過酷な状況下にあった。

主な看護業務として、救急外来受診患者の看護の他、救急搬送受け入れであった。内容としては、採血、点滴留置および点滴管理、レントゲン・CT・MRI 検査、救急搬送受け入れ時における生体モニター装着・管理、12 誘導心電図装着等、患者に必要とする看護・対応を行った。

患者層としては、小児～高齢者まで幅広く、内科系・外科系・循環器系等様々であった。特に、腹痛・嘔気・嘔吐・下痢の症状を呈する患者が多く、中には肺炎を引き起こしている患者もいた。転倒による高齢者の救急搬送が何例かあった。切傷患者や低血糖に伴う意識レベル低下も比較的多いように感じられた。看護を行う上で配慮したことは精神面でのケアであった。身内を亡くした悲しみや辛さ、長期におよぶ避難所の生活から生じるストレス、家屋をはじめすべてを失い、先行きの見えない不安等、患者のみならず家族に対しても目を向け寄り添う看護を行った。

引継ぎ方法としては、申し送りを次の勤務者に行い、最終日まで支援ナースとして活動した。

所　感

被災後 1 ケ月が経過したが、PTSD といった精神面からのフォローを要する患者や家族が増えているように感じた。これは、現地の医療従事者に対して配慮すべきことである。「心のケア」の必要性を強く実感した。誰かに話を聞いてもらい傷を癒していくことができる環境を整えることも大切であると考えた。私の活動した病院の看護スタッフは連日超過勤務を強いられていたが、常に笑顔で看護にあたっていたことは大変印象的だった。しかし現地の看護スタッフも被災者であることを決して忘れてはならず、少しでも心身が休めることができるよう支援することの重要性を認識した。自分のできることを精一杯行うことを常に念頭に置き活動したが、まだ自分のできることがあったのではないか、という気持ちが強い。

支援を継続していくこと、いつでも支援できるよう日々自己研鑽に努めたい。

災害看護支援ナース活動報告書

報 告 者：長谷川　郁
所属施設：新潟大学医歯学総合病院
報告月日：平成 23 年 4 月　21 日

活 動 日	4 月 11 日（　月　）～　4 月　14　日（ 木 ）
活動場所	施設名　県立大船渡病院　（　県名　岩手県　）

活動内容

4 月 11 日 10 時過ぎに 6 人で県立大船渡病院に到着、メンバーの得手不得手・実践能力を考慮しながらシフト（2 名は救急センター2 交替夜勤×2 回、2 名は救急センター12 時～22 時勤務、2 名は循環器・泌尿器病棟の日勤業務）を分担し、私は循環器・泌尿器病棟の日勤業務に就いた。

4 月 11 日～13 日の間、ペアの受け持ち看護師の指示のもと、再入院患者のアナムネ聴取、担当患者 6～8 名の検温や観察、温度板や経過記録への記録記載、血糖測定、内服介助、口腔ケア、患者移送、ポータブルトイレ排泄介助、点滴配合、静脈留置針・翼状針の刺入、配膳・下膳など、様々なことを行った。入院患者の外来棟での検査（前立腺生検、心カテなど）は病棟の受け持ち患者が介助につくため、その間（1～2 時間前後）の病棟受け持ち業務の代行を行う事もあった。入退院が激しく一番忙しい病棟とのことで、日看協の 2 名の他に、被災した高田病院からも 2 名の看護師が応援に来ていた。慣れないシステムの中でもそれらを尊重し、患者の安全を第一に考えながら看護を行った。また自ら被災者でもありながら勤務しているスタッフの業務量を少しでも軽減できるようにと、最大限の支援を行うよう心がけ、時間が空いた時には積極的にいろんなスタッフに声をかけて業務をサポートした。

私は、6 人のリーダーを担っており、岩手県は広く看護協会との交通事情や距離の問題からコーディネーターがいないため、リーダーが大事な役目を果たすと言われていたため、活動時間が異なる中でも他のメンバーと情報を積極的に交換し、後続派遣ナースがより有効な支援活動ができるようにと、我々の活動の中で挙がった改善点や問題提起を集約して連日協会本部に電話・メールで報告した。

所　感

災害派遣される場所や時期によっても支援の形は様々で、今回は白衣・ナースシューズ不要という事前情報にも関わらず、病院で現地看護師の休息確保のための支援という形だった。どんな場面での派遣となっても柔軟に対応できる実践能力や適応能力、リーダーシップ能力、マネジメント能力、見えないニーズにも気づく力、そして何よりも強い体力と精神力が必要であることを改めて認識した。

災害看護支援ナース活動報告書

報 告 者：　五十嵐　真由美
所属施設：　佐渡市立両津病院
報告月日：平成 23 年 4 月　20 日

活 動 日	4月　12日（　火　）～　　4　月15　日（　金　）
活動場所	施設名　　石巻女子高校避難所　　（　県名　宮城県　）

活動内容

高台に建つ石巻女子高校避難所は、その立地の良さからライフラインは一週間以内に復旧し、灯油の配給もうまく行っており夜間寒さに震えることのなく、収容されている被災者の方々の自治活動も順調に機能していました。

被災者収容人数は現在 95 名、生活の場は二部屋で比較的若く健康的な方々と慢性疾患者や要支援者の方々等で別れていました。

感染隔離部屋も階を隔てて確保されており、また、至る所に消毒薬が置いてあり、衛生面はかなり行き届いているようでした。

災害が発生した当初に支援を開始した方々の初期活動が大変すばらしいものであったと実感すると共に、それを継続し発展させていくことの大切さを学びました。

「せっかくの貴重な援助物資が届いても仕分けをする人がいない為活用する事が出来なかったり、溜まっていくばかりでどうする事も出来ない。」といった声を別の避難所の支援ナースから伺いました。その点ここの避難所は、様々な支援ボランティアが入っており援助物資などもスムーズにさばかれていました。

新潟県からは（ＪＭＡＴ）医療班のメンバーが入れ替わり毎日診療を行っていました。

上記のような状況での災害支援ナースとしての活動は

・朝昼夕のラウンド（バイタルチェック、血圧測定、状況把握・・・）被災者とのコミュニケーション作り。
・インフルエンザ隔離解除後の部屋の消毒、寝具の始末等。
・昼夜逆転で尿失禁があり、歩行不安者の夜間付き添い（個室でポータブルトイレ使用）。
・（ＪＭＡＴ）医療班との連携、処方箋の受け渡し等。
・宮城県内でボランティア活動をされている薬剤師からの市販薬の受け取り等。

所　感

全て自己完結型で行い食料、水等は被災者から頂いてはいけない。寝袋持参で相当な寒さにも耐えうること。」と自分でも相当な覚悟で臨みましたが、支援先の避難所がかなりうまく機能していた為断ることがかえって不自然であり、この困難な状況を分かち合っている同士のような雰囲気の中、ストーブの焚かれている校長室で温かい食事をいただいたりしました。派遣された避難所によってかなり状況は違っているようです。

貸与されたベストはかさばり、ポケットに物をたくさん入れると前の方にズッて来て少々勝手が悪かったようです。食料以外全て準備され、そのまま出発できるものが貸与されている県が多く、災害に対する意識の高さに驚きました。

災害看護支援ナース活動報告書

報 告 者：池　良子
所属施設：かもしか病院
報告月日：平成 23 年 4 月 21 日

活 動 日	4月　12日（　火　）～　　4月　15日（　金　）
活動場所	施設名　　石巻市立大街道小学校　　（　県名　宮城県　）

活動内容

・診療の介助　　・血圧測定　　・各部屋のラウンド
・救護室に来室された方への対応　・傾聴など。
・診療時間以外に来室された方へは、症状に合う市販薬を１日分渡した。
1回だけだったが近隣の方の診察希望があり、医師がいなかったため断ろうとしたが、診察の希望が強く、バイタル測定、症状を見て家人に救急車を要請してもらった。
・ラウンド時には１カ月ぐらい前の創部が改善していない人、臥床していてぐったりしている人、腰痛が時々あると訴える人　血圧が高いが症状が無い人などを発見し診察へ誘導したり、回診時診察してもらったりした。
・自分１人で入浴できなさそうな人が数名いたため介助入浴を依頼し、入浴介助してもらったところ歩行できる人ではあったが、やはり排泄や歩行に介助が必要なため仙骨に硬結ができていたり、陰殿部大腿内側にただれがある人がいた。
・水は出ておらず、下水は詰まっているため使用が出来ず、拭き掃除もできない、ちりが舞うような環境でしたが、手洗い・汚物の処理はきちんとされていて感染症を出していないということでは皆様方の努力がうかがえた。

所　感

看護師でしかない私達が、市販薬とはいえ薬を渡したり、急患の方を診たりということは、看護師としての領域を越えているのではないと思った。
しかし、避難生活のため、精神的にも身体的にも疲れきっている人達にとっては、私達の行為も存在も必要な事だと思った。

災害看護支援ナース活動報告書

報 告 者：服部　はつ子
所属施設：厚生連　豊栄病院
報告月日：平成 23 年　4 月　25 日

活 動 日	4月　15日（　金　）～　　4月　18日（　月　）
活動場所	施設名　汽仙沼総合体育館　　（県名　宮城県）

活動内容

4 月 15 日（金）9 時 30 分　現地到着　9 時 30 分～10 時 30 分　日本看護協会先発メンバーからの引き継ぎ　10 時 30 分～12 時　館内オリエンテーション、アリーナ、サブアリーナ巡回　13 時～16 時　昼食、仮眠　16 時～17 時　ﾁｰﾑﾐｰﾃｨﾝｸﾞ申し送り　17 時～21 時　夜勤（健康相談、外傷処置、巡回）　21 時～3 時　仮眠

4 月 16 日（土）　3 時～5 時　夜勤（健康相談、巡回）　5 時～8 時　仮眠
8 時～9 時 30 分　申し送り、ﾁｰﾑﾐｰﾃｨﾝｸﾞ　9 時 30 分～12 時　屋内・屋外（仮設トイレ）清掃・点検　12 時～15 時　休憩　15 時～　医療ｽﾀｯﾌﾐｰﾃｨﾝｸﾞ
16 時～17 時 ﾁｰﾑﾐｰﾃｨﾝｸﾞ、申し送り
17 時～21 時　夜勤（健康相談、外傷処置、巡回）　21 時～4 時　仮眠

4 月 17 日（日）4 時～8 時　夜勤（健康相談、巡回）8 時～9 時 30 分申し送りﾁｰﾑﾐｰﾃｨﾝｸﾞ　9 時 30 分～15 時 仮眠　休憩　15 時～16 時　医療ｽﾀｯﾌﾐｰﾃｨﾝｸﾞ　16 時～17 時申し送り　17 時～2 時　夜勤（健康相談、外傷処置、巡回）　2 時～仮眠

4 月 18 日（月）
8 時　現地出発　12 時　宮城県看護協会出発　18 時日本看護協会会館到着　解散

所　感

派遣先かに向かう車中から見える景色は瓦礫の山、川の中に放置されたままの多くの車、あり得ない場所に乗り上げている漁船…。発災から１ヶ月経てもまだ残る地震の爪痕。「汽仙沼は、地震で家が潰れたところに津波が来て、タンカーから流れ出た重油で火災が起こった…3 重の災害だ。ひどいものだ」バスのドライバーさんがつぶやく。派遣先となった汽仙沼市総合体育館の避難者の生活風景は、テレビで見る様子そのものだったが、医療支援体制は、完備されているように感じた。発災直後から埼玉からの医療チームが常駐し、検査設備はないものの内科。外科、小児科の診察が行われ、全国各地から集まった看護・介護の支援スタッフがチームを組んで組織化された中で活動していた。医療材料が不足した中での支援活動を覚悟していただけに拍子ぬけの気持ちがした。館内ですれ違う人々も「ごくろうさまです」と挨拶してくれる。看護協会支援ナースは、主に夜間帯の医務室に常駐し、訪れる利用者対応にあたった。避難所の夜は、長く感じ、何時になっても人の気配が途切れることはなかった。「眠れないんだ」「腰が痛くて…」「血圧は測ってくれ」「咳がでる」「熱っぽい」訪室の理由はさまざまだった。処置が終わっても話を続ける人たち。「昼間自宅の片付けに行ってね」「娘が見つからないのさ。歯型があれば…」「仮設が決まったよ。でも…ここから離れたくない」頷いて話を聞く。出発の朝、認知症の家族を抱え車中泊を続けている人を訪問し、先が見えない生活に接した。自分の感情が被災者の方々に入り込むような思いがした。帰り際、前夜、医務室で話をした人に会い「我慢してたんだ。泣いて吹っ切れたよ」と声をかけられた。短期間の支援活動では、形にしたものを現地に残す事はできないが、一人一人の支援ナースの点の活動が集まり継続されることがいつか線となり、被災された方々の役に立つのではないかと思う。私自身も今回一緒に活動した支援スタッフや地元の友人家族からの支えを感じた。

災害看護支援ナース活動報告書

報 告 者：谷口　雅子
所属施設：小千谷さくら病院
報告月日：平成 23 年 4　月　25 日

活 動 日	4　月　19　日（　火　）～　4　月 22　日（　金　）
活動場所	施設名　門脇小学校　　県名　宮城県

活動内容

4/19　8：00～22：00　避難者　556 名

前任者から引き継ぎを受けながら約 300 名（武道場　校舎 9 室）のケアに当たった。

① ＨＴの既往のある人、今回血圧上昇のある方の血圧測定
② 認知症の方のトイレ誘導、内服薬服用確認
③ 湿疹のある方の洗浄、軟膏塗布
④ 症状の訴えの方のアセスメント、ケア、薬の選択、医療チーム受診の助言
⑤ 発熱者又は発熱後の経過観察　ケア
⑥ 心のケアが必要な方の傾聴

医療チームとのミーティング

4/20　6：00～22：00　避難者　537 名（本日、2 時避難で 19 名の方が退去）

一人で前日と同場所のケアにあたった。

① ～⑥
⑦ あかぎれの方の処置
⑧ 夜間、めまい、吐気の方の経過観察、肩～背中マッサージ、運動の助言

4/21　6：00～22：00　避難者　532 名

後任者に引き継ぎながらケアを行った。

① ～⑦

本日、夜間発熱者多発、医療チームと連携
ある一室で飲酒でトラブル、犬に咬まれた小学生あり
同室の被災者の話の傾聴　　ラジオ体操

4/22　6：00～7：30

②　⑤の一部

所　感

発災後 1 ヶ月以上経っていた為、ある程度の物資、ライフラインは確保できていた。地域の人が物資配給、トイレ掃除等自立できていた。なるべく自分たちで行える事には手を出さず活動した。長い避難生活のストレス、偏った食事（塩分が多い）から血圧の上昇が目立っていた。被災者の方は、そこにＮｓが常駐するだけでいつでも血圧を測ってもらえる医学的相談ができると安心されていた。

災害看護支援ナース活動報告書

報 告 者：田巻　美緒
所属施設：新潟市民病院
報告月日：平成 23 年　4 月　25　日

活 動 日	4 月　19　日（　水　）～　　4　月　22 日（　土　）
活動場所	施設名　　気仙沼鹿折中学校　　（県名　　宮城県）

活動内容

・発災から 1 ヶ月以上が経過し、鹿折中学校避難所では、電気・水道・ガス（炊き出しのみ使用）が使用できる状態であった。入学式前ということもあり、避難所間の大移動が終わった時期であった。600 人近くいた避難住民は、現在では 243 人となっていた。
支援ナースの他に、鹿折中学校では、横浜市と山形県の医療班が連日、日中の午前・午後 2 時間ずつ保健室で診療所を開いていた。

・私達は、まず医療班と話し合い、避難所にいる方々の情報把握を改めて行った。体育館の全体 MAP はあったが、実際に現時点で何人の小児や要支援の方がどこにいるのかがだいたいでしか分からない状態で、館内の年齢層も不明であった。MAP に年齢や要支援、要介護なども付け加え、１人１人の情報が MAP を見ればすぐわかるようにした。

・避難者の健康状態は、風邪症状や感染疾患はほとんどおらず、比較的落ち着いていた。夜になると咳が止まらない方が多く、周りを気にしてさらに不眠となる方もいた。咳が出る方は、日中自宅の片付けをする人に目立ち、ほこり等によるアレルギー症状で、診療所受診をすすめたり医療班に報告した。

・避難所では、グラウンドに仮設住宅が造られ始めたりと復興に向けて進んでおり、避難者自身も自立に向けて生活する時期でもあった。そのため、何でも手伝うということはやめ、いかに自立に向けて支援できるか考えた。今まで、ナースがメインで行ってきたトイレ掃除は、感染認定ナースの意見やトイレ清掃を率先して手伝ってくれる避難者の方の意見をもとに手順ポスターを作成した。作成後は、ポスターを見てもらいつつナースは指導手伝い役として避難者さん中心に清掃を行ってもらった。

・また、ポータブルトイレも設置してから、清掃されることなくそのままの状態で、使用されていた。汚物がついたオムツが散らばっていたりした。よく使用しているケアハウスの避難者さんに声をかけ、一緒に清掃、片付けしつつ、清潔・不潔を混合させないよう指導した。ケアハウスの方が使いやすいように、一緒に物品の置く位置を考え作り直した。

・継続して統一した活動、情報伝達ができるよう、情報伝達ができるよう、情報の活用が大切と感じた。

・今後、避難者の方々の自立に向けて関わることは、外部から支援にきた者としては、とても難しく感じる。指導に到るまでの避難者さんとのコミュニケーションづくりは、とても大切であり 24 時間共に生活することで構築できたのではないかと思う

災害看護支援ナース活動報告書

報 告 者：五十嵐　直子
所属施設：小千谷さくら病院
報告月日：平成 23 年　4 月 28 日

活 動 日	4 月　19　日（　火　）～　　4 月 22　日（　金　）
活動場所	施設名　　釜小学校　　（　県名　宮城県）

活動内容

リーダー会に参加　　ラウンド　　ＢＰチェック

4/19　移動入浴介助　　医療チームの診察　　往診の介助
体育館にて嘔吐者の対応→イレウスの疑いにて救急搬送
ＢＳチェック、インスリン自己管理の方の指導
夜間、咳漱の止まらない方の対応（体育館にて）

※ 移動入浴は、前任者が依頼しており、初めて実施となった。
利用者の方が継続して欲しいということで、本部の方に依頼し、週 1 回実施できることになった。

※ 嘔吐については、他の避難所でノロウイルスが発生していることもあり、リーダー会で吐物の処理について説明を行い、本部に必要物品の準備を依頼する。

4/20　福岡県の保健師チームの訪問あり→現状を報告し､石巻市の保健師に相談したいこと（被災者からの相談）を伝えてもらった。この日から水洗トイレの使用が許可となったが下水道が不十分な為、仮設トイレとの併用でペーパーなどを外の袋に入れていた。水道も節水で十分な手洗いができず衛生面でも問題であった。

4/21　後任の支援ナースより日看協の方針（支援ナースの撤退）を伝えられた。今後、被災者の方の自立に向けて本部（行政）の方と話し合いを持ったが、結局夜になって日看協からメールでその話は一時中止の指示が入った。この日も体調不良や発熱者の対応を行った。石川県の「心のケア」チームの訪問あり→気になる被災者の方の情報を提供する。
深夜になって、被災者の方が医務室を訪れ「亡くなった子供が夢に出てきた。死亡届を書いた自分を責めてしまう。」等の訴えを傾聴。その方は「24 時間、皆さんがいてくれて良かった。」と言って下さった。

所　感

・現地は想像以上のもので、復興というにはまだ程遠いような現状であった。私が行った釜小学校は電気さえも復旧しておらずトイレも仮設で、不便な生活を強いられていた。40 日に及ぶ避難所の生活に疲労やストレスが蓄積している様子が色濃く感じられた。
自立に向けた支援の時期にきているというが、あまりにも甚大な規模の大きい被害を受けた被災者には、まだまだ支援が必要だと感じた。

新潟県看護協会　　ＦＡＸ番号：０２５－２６６－１１９９

災害看護支援ナース活動報告書

報 告 者：大掛　陽子
所属施設：訪問看護ステーションさんわ
報告月日：平成 23 年　5 月　2 日

活 動 日	4 月　21 日（　木　）～　　4　月 24 日（　日　）
活動場所	施設名　　気仙沼総合体育館　　（ 県名　宮城県 ）

活動内容

4/21　気仙沼総合体育館に 2 名で派遣されました。
医療者ミーティングに参加後、前任の支援ナースからの日本看護協会からの支援ナースは夜勤専従と申し送られ 3 日間 15：00～9：30 過ぎまで活動しました。
朝夕 1 日 2 回の全体ミーティング（全支援者の代表が参加）医療者ミーティングに参加以外は、健康相談室にて来所者のバイタルサイン測定、必要に応じて市販薬の訴え傾聴。苦情対応をしました。現地対策本部（宮城県看護協会）へは、メールで 1 日 1 回支援ナースの安否と現地報告をしました。

気仙沼総合体育館はガス以外のライフラインは復旧していました。800 人位の避難者がメインアリーナ、サブアリーナ、武道場 1、武道場 2 の 4 エリアに分かれて生活されていました。部屋の広さが異なる為、常に暖かいエリアもあれば、肌寒いエリアもありました。インフルエンザやノロウイルスの方は、別室に隔離されていましたが、4 月中旬に対象者がいなくなり閉鎖されていた。手指消毒剤やマスク等、十分にそろっていますが、風邪症状の方が多く体育館内の診療所（他県からの医療チームで構成）で風邪薬を処方されている方が多かったです。

食事は昼と夕に自衛隊の炊き出しや外食チェーン店からの配食、お湯は事務所内のスタッフが適宜お湯を沸かして用意していました。

入浴の支援はなく、シャワー室はエリアの班ごとに使用できる曜日が決まっていましたが、寒いという事で使用していない高齢者が多いようでした。
震災から 1 ヶ月以上たち、避難者の自立に向けて診療所の閉鎖や健康相談室の夜間閉鎖の準備がされていました。要介護者や高齢者への支援やニーズを把握する為の調査が始まっていました。

所　感

避難者の自立支援に務めなければでしたが、要支援者に対しての自立支援の難しさを感じました。要介護者としてリストアップされている以外に要介護者がいることに気付かなかったり、朝食が配食されなかったり、食事が固くて食べれない事で栄養不足、体調不良が改善されないという現状を知りました。

自ら訴えることが出来る方以外にも、訴えたくてもできない方々にも目を向け、心のケアの大切さを感じました。避難者が 1 日でも早く震災前のような生活が送れるよう支援が出来たらと思います。

新潟県看護協会　　ＦＡＸ番号：０２５－２６６－１１９９

災害看護支援ナース活動報告書

報 告 者：今出　晶代

所属施設：新潟県看協訪問看護ｽﾃｰｼｮﾝつくし

報告月日：平成 23 年　5 月　2 日

活 動 日	4 月　22　日（　金　）～　　4　月　25 日（　月　）
活動場所	施設名　福島ビッグパレット　　（県名　福島県）

活動内容

・感染観察室（ノロウイルス感染者が増えたため、救護室等から離れたホールの一角に作られた。）に入室されている避難されている方へのケア

一時期は 20 名以上の入室者があったとのこと。

上記活動期間は、ノロウイルス罹患者はいなかったが発熱、咳嗽等で入室されていた。

・避難されている方の健康チェック、相談対応

※　一班 6 人のうち 1 人がリーダー（リーダーとして活動しました。）他はメンバーとして仕事を分担しました。

所　感

避難期間も長期になっており、体調をくずす人が増えている。降圧剤服用されている方が多い。自宅にいれば適度な運動とバランスのとれた食事、十分な睡眠で血圧も安定しているだろうに、血圧が高い方が増えている。また、臨時診療所から処方される薬は種類や量の変更（重複処方もあった。）もあり、要注意。

長い体制での支援が必要だと思った。

一班６名人で、様々な年代・勤務場所のＮｓどうしでの情報交換もでき有意義だった。

後続災害支援ナースへの引き継ぎ書

福祉避難所・避難所概要

＊活動期間の最終日に記入し、次の班への引き継ぎに使用する。

＊最終的にその場所での支援が

<table>
<tr><td>福祉避難所・避難所名</td><td colspan="2">ビッグパレットふくしま
避難者数　22 日（1642 人）、23 日（1645 人）、24 日（1640 人）</td></tr>
<tr><td>場所</td><td colspan="2">福島県郡山市南 2 丁目 52 番地</td></tr>
<tr><td>責任者・統括者</td><td colspan="2">全体責任者＝県庁職員
支援 Ns 担当＝滝沢 PHN
看護職員統括＝県 PHN</td></tr>
<tr><td>医療支援（救護所）の有無</td><td colspan="2">☑ 有　　☐ 無</td></tr>
<tr><td rowspan="2">1 日の流れ
定期的な連絡・報告会など
（日勤）</td><td>リーダー</td><td>メンバー</td></tr>
<tr><td>看護職員統括との連絡
Bフロアの健康チェック
感染観察室の全体管理</td><td>・感染観察室入室者の看護
＊必要時
リーダーの補助→ﾗｳﾝﾄﾞ
準深夜勤＝救護室支援</td></tr>
<tr><td rowspan="2">記録
メンバー
① 体温表
② 災害支援 Ns への引継ぎ書　（被災者データ）

リーダー
① マップ→情報を追加記入
② 必要な人の健康相談票
③ 避難所活動記録
④ 支援 Ns 対応 Pt 数
⑤ 感染者ﾘｽｸｱｾｽﾒﾝﾄ
① ～③は PHN へ
④ ⑤は JNA へ
全員　支援 Ns 活動記録
最終日にリーダーが集めて JNA へ</td><td>8：00　全体ミーティング
終了後　観察室申送り
9：00　看護職員ﾐｰﾁﾃｨﾝｸﾞ
Bフロア　ラウンド</td><td>8：00　全体ミーティング
終了後　観察室申送り
Cﾎｰﾙﾄｲﾚﾁｪｯｸ
観察室入所者への看護
（必要な日常生活援助含む）</td></tr>
<tr><td>11：30　看護職員ﾐｰﾃｨﾝｸﾞ
12：00～13：00　休憩
観察室入所者への看護
Bフロア　ラウンド
記録
16：30　看護職員ﾐｰﾃｨﾝｸﾞ
16：45　観察室申送り</td><td>12：30　昼食受け取り
→食事援助
12：00～13：00　休憩
観察室入所者への看護
C　ﾄｲﾚﾁｪｯｸ
16：45　観察室申送り</td></tr>
<tr><td rowspan="2"></td><td>＊　定期連絡は
福祉班　OR にある
メール連絡のみで可
（JNA には不要）</td><td>準夜勤　16：30　看護職員ﾐｰﾃｨﾝｸﾞ
16：45　観察室申送り
観察室入所者への看護
要請のある時、救護室支援
休憩は適宜　　Cﾄｲﾚﾁｪｯｸ
0：00　申送り</td></tr>
<tr><td></td><td>深夜勤　0：00　申送り
観察室入所者への看護
要請のある時、救護室支援
休憩は適宜　　Cﾄｲﾚﾁｪｯｸ
8：30 頃　申送り
＊　日勤以外はラウンドはしない</td></tr>
</table>

災害看護支援ナース活動報告書

報 告 者：白井　美紀
所属施設：新潟市民病院
報告月日：平成 23 年　5 月　6 日

活 動 日	4月　23 日（ 土 ）～　　4 月　26日（　火　）
活動場所	施設名　石巻市立住吉中学校　　（　県名　宮城県　）

住吉中学校には 197 名の方が避難所生活を送っておられた。
電気、水道は開通しており、水洗トイレも使用できる恵まれた環境にあり急性感染症の発症もなかった。
避難所内の自治は、A、B、C、D、4 つの班に分かれて班長さんがおられ清掃当番も決めれれ手おり、毎日夕方のリーダー会議で様々な問題が話し合われ、組織が自主的に活動していた。私達もリーダー会議に参加した。午前・午後の医療班の巡回診療の介助と診療が必要な方のピックアップ、専門科（耳鼻科、眼科）？診察の告知などを行った。
発災後 1 度も入浴していない要介護の方が入浴できるよう医療班を連携して調整を行い、施設での入浴が可能になった。

日々のラウンドでは避難者の方々の様々な思いを傾聴し心のケアチームへの情報提供を行った。各班長さんとの連携、コミュニケーションをとることが重要だと感じたため、後任者に引継ぐ先は各班長より自己紹介をしていただいた。

所　感

活動初日から看護協会の方針「自立に向けた支援」をするために、どう具体的にかかわっていったらよいか、迷いながらの活動であった。

亜急性期となり医療のニーズはさほど多くはなかった（20 人/日程度が診察）が避難者の方々が本当の自立に向かうためには生活の安定が何より必要であり、それは現段階でまだまだ道のりの長いものであった。

正味 3 日間という短いスパンで交替して活動する私達が、お互いに共通認識をもって継続した支援を続けていくためには、行政、自治体と良好なコミニュケーションをとると共に、「少し長い目で見られる」看護職のサポート役も必要なのではないかと感じた。

災害看護支援ナース活動報告書

報 告 者：渡部　道雄
所属施設：悠遊健康村病院
報告月日：平成 23 年　4 月　28 日

活 動 日	平成 23 年 4 月　24 日（　日　）～　　4 月　26 日（　火　）
活動場所	施設名　石巻市立石巻女子高等学校　　住吉小学校　（県名　宮城県）

活動内容

＊　長岡市医師会災害支援医療チーム（ＪＭＡＴ）の一員として活動

・避難所となっている石巻市立女子高等学校、石巻市立住吉小学校に診療所を設立し、避難者および周辺市民の診療介助
・施設周辺のグループホームへの往診介助
・避難者の健康管理
　血圧測定、体温測定、呼吸状態、脈拍測定等バイタルサインの評価
　内服確認
　食事、排泄、睡眠、入浴状況の聴取
・診療所のカルテ管理
・避難者の日常生活動作の評価
・避難者とのコミュニケーション
・避難者への心のケア
・避難所のアセスメントを医療支援本部に報告（本部は石巻赤十字病院）
・診察患者状況を医療支援本部に報告
・後任医療支援チームに引き継ぎ

所　感

東日本大震災から 40 日が過ぎ、復旧が少しずつ進んできていることが伺えましたが、津波が与えた災害は想像以上の規模でした。学校の再開が進む一方で、仮設住宅の供給は遅れています。避難者の健康状況は安定してきていますが、被災状況の格差も大きく、情報が増えることもあり、精神的ケアがこれから重要になると思われました。
支援活動した 3 日間で得た経験をこれから活かしていきたいと思います。

災害看護支援ナース活動報告書

報 告 者：神林　恵子
所属施設：長岡西病院
報告月日：平成 23 年　5 月　3 日

活 動 日	4 月　24 日（　日　）～　　4　月　26　日（　火　）
活動場所	施設名　石巻市立女子高校・石巻市立住吉小学校　（ 県名　宮城県 ）

活動内容　　（ JMAT の一員として参加　）

石巻赤十字病院で、医療支援登録を行った後、市立女子高校に移動し前任の立川綜合病院チームより引き継ぎを受け、午後の診療を行う。女子高校は午後の診療、吉住小学校は午前の診療を行う。

避難所の入所者数、要介護者数、巡回して受診必要者のピックアップ、救護日誌、避難所アセスメントシート、避難所生活における感染管理上のリスクアセスメントシート、救護班活動報告等を石巻赤十字病院は報告。

そのほか、診療の補助、巡回し血圧測定を行いながら話を傾聴したり、トイレの清掃などを行う。

所　感

今回 JMAT の一員として災害医療支援に初めて参加し緊張したが、避難所の各部屋の巡回を行い被災者の方の心労、いつまでこの生活が続くか判らない不安、これからの生活の事などまだまだ大変であるが、3 月 11 日から 1 ヶ月半が過ぎ、精神面の支援、慢性疾患の悪化、栄養バランス等の支援が大切な時期に入ってきている事、避難所の環境に格差があること、避難所の末端まできちんと援助が行き届くように支援する為にどのように関わっていくことが必要なのかなど考えさせられることが多かった。
また機会があれば参加し支援したいと思います。

災害看護支援ナース活動報告書

報 告 者：　杉原　紀子
所属施設：新潟市民病院
報告月日：平成 23 年　5 月　2 日

活 動 日	4 月 27 日（　水　）～　　4 月　30 日（　土　）
活動場所	施設名　　石巻市桃生トレーニングセンター　　（県名　宮城県）

活動内容

4 月 26 日夜に東京を出発し、27 日朝に桃生トレーニングセンターに 10 人で派遣されました。

避難所が集約化してきている状況で、桃生トレーニングセンターは要介護度 1～3 の方を対象とし、30～50 名入所できる福祉避難所として立ち上げたばかりのところでした。
今まで避難所として使用していなかった施設を、自衛隊の方々と前任者が清掃と物資の仕分け、配置決め、介護用自動ラップ式トイレの設置などをしてくださっていました。
前任者とは 1 日ともに活動をし、引継ぎを受けることになりました。

到着後は前任者とともに、ベッドやマットレスの搬送・組立や、パーテーションでの個人スペースの作成、トイレ内の整理など、入所される方のニーズを予測、検討し合いながら住環境の整備や急変時対応のための処置室の準備を行いました。また、入所者の 1 日のスケジュールやスタッフの業務内容の検討、緊急時の連絡先の確認、入所時オリエンテーション内容の検討と説明用紙の作成などを行い、感染予防や衛生面を考慮し清掃のチェック表作成も行いました。準備が整ってからは、入所者役、付き添い役、看護師役を立ててロールプレイを行い、入所者が入所してからの流れの確認と改善点を見つけていき、修正を行っていきました。入所されてからは看護師 2 名ずつが担当となりアナムネ聴取やオリエンテーションを行い、荷物の整理やパーテーションの調整などの環境整備も行いました。その後、足浴などの清潔ケアや入所者からの希望があり散髪を行いました。30 日は朝の出発であり、午後到着予定の後任者への引継ぎは市の担当の保健師の方に引継ぎ事項を伝えてもらいつつ書面にも残し、活動を終了となりました。

所　感

入所者を迎え入れるための準備段階から迎え入れに携われ、入所者から「ゆっくり休めそうな所でよかった」という言葉をいただきありがたく感じました。発災から 1 ヶ月以上が経った回復期の時期で、感染・衛生面はもちろん、転倒転落等の危険がないように整えることも重要であるが、平常時の生活を送っていけるように環境を整えていく援助も重要であると再認識しました。また、混乱した状況で様々な職種の方や団体の方々がいて、その中で自分の役割を考えて動くこと、情報をしっかり確認をして明確に伝えることが重要であると痛感しました。

災害看護支援ナース活動報告書

報 告 者：白倉　透規
所属施設：立川綜合病院
報告月日：平成 23 年 5 月 14 日

活 動 日	4 月 3 日（日）～　4 月 7 日（木）
活動場所	施設名　宮城県看護協会内　現地対策本部　（県名　宮城県　）

活動内容

3 月 26 日～29 日に石巻市内避難所で支援ナースとして活動した直後に、上記期間で現地対策本部でのコーディネーター任務に携わる機会を得て活動しました。
以下に活動内容について報告致します。

活動期間中は 3 名のコーディネーター(1 名をチーフコーディネーターとして)で対応しました。

コーディネーターの役割は

1) 派遣される災害支援ナースの安全管理

2) 災害支援ナースの活動および生活環境などの現地調整

3) 災害支援ナース、現地対策本部(宮城県)、JNA 災害対策支援本部との連絡・調整

でした。活動期間中は支援ナースを連日 10～20 名受け入れ、派遣先の避難所:気仙沼市内避難所 3 か所、石巻市内避難所 16 か所(4 月 5 日から 17 か所)に派遣調整しました。(活動期間中、石巻市内には福祉避難所が 1 か所のため、さらに 1 か所増設のため、各避難所での要介護者をピックアップ中でした)

具体的な活動内容は、チーフコーディネーターの下、主に支援ナース受け入れ対応・派遣調整の任にあたりました。任務にあたり派遣先避難所の生活・健康管理状況、支援状況を把握するため、活動初日・2 日目に支援ナースに引率をして調査活動にあたりました。生活・健康管理状況は支援ナースが派遣された時から問題になっている感染症対策についての問題が多くみられ、避難所によって対策に差があることもわかりました。対応策として、支援ナース派遣現地オリエンテーション時に現状を伝え対応してもらうよう働きかけました。結果、支援ナースの活動によって改善に向けての対応が少しずつみられるようになりました。

さらに、支援ナースからの相談を現地対策本部内で電話対応をしました。相談内容は避難所内の看護ニーズ・支援ナース増員の要望・避難者の方々との関係について等がありましたが他のコーディネーターと協力し調整することができました。

活動 4 日目に支援ナースの現地受け入れが午後から早朝に変更する時期であったため、対策本部内で受け入れ対応の変更任務に関わりましたが、大きな混乱なく支援ナースを受け入れ各避難所に派遣・調整することができました。

所　感

1. 現地コーディネーター任務に就かせて頂き、
   1)各避難所状況、支援ニーズに沿ったアセスメント
   2)アセスメント結果に沿った支援ナースの的確な配置
   を客観的に論理的に判断する重要性を学ぶことができました。
2. 県看護協会災害看護委員をさせて頂いている関係から、今後の支援ナース養成・更新コースに学んだことを活かしていければと考えます。

03.29.2011

03.26.2011

災害支援
日本看護協会
03.26.2011

03.26.2011

男性
03.29.2011

災害看護支援ナース活動報告書

報 告 者：星野　靖
所属施設：県立小出病院
報告月日：平成 23 年 5 月 3 日

活 動 日	平成 23 年　4 月　16 日（ 土 ）～　4 月　19 日（ 火 ）
活動場所	施設名　ビッグパレットふくしま（避難所）　（県名　福島県 ）

活動内容

派遣者：日本看護協会　災害支援ナース派遣　第 68 班 6 名（保健師 2 名、看護師 4 名）
避難者：福島第一原子力発電所に関連する避難対象者（富岡町、川内村他）約 1800 名
避難所の構成：避難所＝コンベンション施設 1～3 階（通路含む）
救護所＝外来機能、3 交替　準夜・深夜勤務者のうち 1 名を日看協が担当
観察室＝感染性胃腸炎の集団発生に対する感染拡大防止対策として、有病者の集中管理を目的に 4 月 8 日より設置、24 時間体制（3 交替）での健康管理を日看協が担当

避難所・観察室収容者数

4 月 16 日	避難者 1,797 名	観察室 7 名（胃腸炎 5 名、flu（疑）1 名、他 1 名）
4 月 17 日	避難者 1,785 名	観察室 9 名（胃腸炎 4 名、flu（疑）1 名、呼吸器 2 名、水痘 1 名、他 1 名）
4 月 18 日	避難者 1,764 名	観察室 5 名（胃腸炎 3 名、他 2 名）
4 月 19 日	避難者 1,710 名	観察室 4 名（胃腸炎 3 名、他 1 名）

観察室業務
入室者の状態観察、食事準備
トイレチェック・トイレ物品補充（ペーパータオル、手洗い石けん、速乾性手指消毒薬）

救護所業務
日勤：避難所ラウンド（保健師業務の応援）
健康チェック（感染徴候の把握）、嘔吐時の対応、消毒
生活エリアの衛生管理・指導、食品管理
エリアマップの作成（避難者地図）、入所者名簿作成の説明・回収
トイレチェック・トイレ物品補充（ﾍﾟｰﾊﾟｰﾀｵﾙ、手洗い石けん、速乾性手指消毒薬）
準夜・深夜勤：救護所受診者の対応
V/S 測定、薬剤処方（夜間は医師不在のため、市販薬を配付）
必要時救急搬送、観察室への入室

所　感

・感染管理における初期対応の重要性および地域に対する感染対策指導実施の必要性

当初、救護所で嘔吐・下痢を呈する受診者が多数認められた段階で食中毒疑いとして対応されていた。その後の検査でﾉﾛｳｲﾙｽ感染症と判明した段階でようやく吐物処理・手指衛生指導、トイレの衛生管理と介入が行われている。避難所での胃腸炎拡大（受診者最大 106 名/日）を受けて我々の派遣と同時期に国立感染症研究所のメンバーが調査に入っていたが、その評価で初期対応の重要性が指摘されていた。

今回の災害においては、緊急避難をせざるを得ない状況であり感染症流行の予測は困難であったと思うが、今後の教訓として避難所における衛生管理・感染対策については初期から発生を予測した対応が重要となる。加えて日常から感染対策行動に対する地域（学校を含む）への啓蒙活動も我々の重要な役割である事を認識させられた。

観察室（ﾊﾟｰﾃｰｼｮﾝ奥）

救護所全景

救護所（診療所）受け付け

災害看護支援ナース活動報告書

報 告 者：中野　敦
所属施設：上越地域医療センター病院
報告月日：平成 23 年 5 月　11 日

活 動 日	4月　24日（　日　）～　　4 月　27 日（　水　）
活動場所	施設名　岩手県立大船渡病院　　（　県名　　岩手県　）

活動内容

岩手第 85 班 8 名は 4 月 23 日 22：00 に日本看護協会ビルを出発し、翌日 10：30 岩手県到着。4 名は高田第一中学、残る 4 名が大船渡病院に派遣された。大船渡病院の 4 名は 2 名ずつ救急センターと病棟を分担し、私は循環器・泌尿器病棟の配属となり日勤業務に就いた。

活動内容は、病棟看護師のサポート的な業務が多かったが、検査等の介助で受け持ち看護師が 1～2 時間病棟に不在となる間は、バイタルサインの測定・状態観察や点滴チェック・施行等の業務を受け持ち看護師の代わりに行った。配属となった病棟は、院内でも 1 番忙しい病棟で、スタッフが連日超過勤務せざるを得ない状況でマンパワーが不足しており、日本看護協会 2 名の支援のほかに被災した高田病院からも 2 名応援が来ていた。私はその過酷な状況下で自らも被災者である病棟スタッフの業務軽減に少しでもなれるように、積極的に業務を行った。

また、85 班はリーダーが高田第一中学の派遣であった為、サブリーダーとして大船渡病院派遣メンバーの状況報告や緊急連絡をメール・携帯電話でリーダー・協会本部に行った。

所　感

震災から一カ月半が経過したが、病棟スタッフには過酷な状況下での勤務が続いていた。しかし、現地の看護スタッフの皆さんは常に笑顔で患者さんに接していて、とても感動し心に残った。今回は病院での支援で看護スタッフの休息確保のための派遣であった。自分にできることを精一杯・積極的に行う事を心がけて業務に就いたが支援を終えて振り返ると、もっと自分に出来た事があったのではないとの後悔の思いが強い。

災害支援を行う上で、どんな状況にも対応できて現場の必要を見抜く能力が必要であると痛感した。これからも自分の能力を高める努力をしつつ今後に備えていきたい。

災害看護支援ナース活動報告書

報 告 者：鳥海　加奈子
所属施設：新潟臨港病院
報告月日：平成 23 年　5 月　17 日

活 動 日	4月　26　日（　火　）～　　4月 29　日（　金　）
活動場所	施設名　　ビッグパレットふくしま　　（　県名　　福島県　）

活動内容

・避難所に入所中の被災者様の健康管理、健康チェック、健康相談

・感染徴候のある入所者を感染管理室で経過観察

所　感

もうこんな悲しい出来事は起こってほしくないが、次回も活動したい。
被災し、約 2 カ月経過していたため、入所されていた方々も前向きであったがストレスを感じているのが分かった。
私は、今回少しでもその方々に笑顔や安心をもたらせる事ができたのであれば災害支援ナースになった意義を感じた。

新潟県看護協会　　ＦＡＸ番号：０２５－２６６－１１９９

災害看護支援ナース活動報告書

報 告 者：青木　太
所属施設：北日本脳神経外科病院
報告月日：平成 23 年 5 月　13　日

活 動 日	5月　6 日（　金　）～　　5　月　8　日（　日　）
活動場所	施設名　石巻市立門脇中学校　　（　県名　宮城県　　）

活動内容

（JMAT の一員として参加）

5 月 6 日（金）

朝 6 時に県庁出発。11 時に石巻赤十字病院に到着。医療支援登録、オリエンテーション後、前任者のチームより引継ぎを受け、午後の診療を行う。

診療後、石巻赤十字病院に戻り、救護日誌を提出。

18：00 のミーティングに参加。

5 月 7 日（土）

1 日診療を行う。

門脇中学校の避難所本部、巡回ナース、日赤の心のケアチーム等と連携し受診を必要とする方をピックアップし、情報の共有に努めた。

5 月 8 日（日）

午前の診療が終了後、後任チームへの引き継ぎを行い活動を終了した。

・受診者はカゼ症状の方が多く、他、高血圧、不眠の方が多かった。
・石巻赤十字病院のミーティングで、これからは慢性期に入り、地元の医療に戻していくことが重要とのことだった。

所　感

3 日間しかないため、スムーズに活動するためには十分な引き継ぎが必要だと感じた。診療の補助、避難者との関わりなど、災害看護は日々の看護の延長線上にあるものだと再認識した。

今回の経験を日々の看護に活かし、次の機会に備えたい。